講演

「総合とは何か」
——情理と場裏——

多元数理科学研究科教授
堀　内　　守　先生

私は今年度より多元数理科学研究科に移りましたがなぜ「多元」なのか。「多元」と「総合」とは大いに関係があります。辞書を見てもよくその意味がわからないのですが副題の「情理」（じょうり）と「場裏」（じょうり）ということにあると思います。一方はやまとことば風に読んで下さい。つまり、「なさけのことわり」と。もう一つは場所の「場」であり、その「裏」であります。表街道よりも裏街道のほうが実情がよくわかるものです。

ただいま授業を見ていただき、そのあと分科会にご参加いただきました。さてその授業の中で生徒が持っている小道具がありますが、その小道具に目をつけるべきであります。たとえば筆入れ一つとってみても一つとして同じものはないのです。もう一つは、一般の学校では生徒一人一人の上履きが全部違っています。ここでもう一歩突っ込んで考えると大量生産の概念が変わった——ということです。かつての大量生産は画一的な規格品に合わせたものの大量生産でした。今は個別的な大量生産が可能になりました。このようなライフスタイルの変化をバックに置いてみると教育のやり方が変わってきたのがわかります。これが一つの目の付けどころとなります。

やや面白く解説しますと、新しい現象を説明するための、新しい concept を見つけたら世界がぐーんと広くなります。これが「総合」の第一です。

では、学校はどうなったかといいますと、80年代の後半から、「業態革命」に入ったということを私は唱えてきました。では「業態」とは何かというと、—それに対比する言葉は「業種」になりますが—たとえば薬局に行くと薬品だけでなく化粧品や日用品まで売っています。こういうのが業態革命です。学校もかつてのように知識や生活態度だけを教える所ではなくなってきていて、あらゆるものが社会から頼まれるようになり、引き受けざるをえなくなってきています。したがって職員室へ行って先生方の様子を見ていますと、その忙しさは10年前とは比べものにならないくらいになってきています。そうすると先生方は精神的な苦労よりも神経的な苦労の方が多くなり、気をつかうことが多くなります。先生方のしゃべりかたも早口になりました。以前は話し方も非常にゆっくりであったし、知識が整理され板書にしても必要最小限のことが書かれ芸術作品のようなものが見られました。今は沢山書くわりには若干整理されていないのではないのか。また、使うチョークも種類が増えました。このようなことが起こっているのが「業態革命」の小さな出来事なのです。

次に私たちが日常見ている新聞について考えてみることにします。新聞は朝刊の場合36ページあります。400字詰の原稿用紙にしますと400枚を越えます。もう1冊の本になるのですが、これをいろいろな読み方をされる方がいらっしゃいます。私の17年の統計によりますと平均15分かけて読まれます。学生で早いのは3分というのもいました。400枚をなぜそんなに早く読めるのかというと、見出しが付いている、割りつけがきちんとできている、しかもどのページはどうなっているのか区画整理がきちんとできているからです。それに従って読んでいくのだから簡単に読めるのです。ところが中に一つだけ読みにくいところがあります。社説という欄です。これは論じていますので何を言いたいのかわからないというのが時々あります。公平を期していろいろな意見や説が並べてあり、あとは読者の判断に任せていて、民主的であるようで不親切です。そうすると下の欄に目が行きまして朝日新聞なら「天声人語」、毎日新聞なら「余語」、中日新聞なら「中日春秋」というのがありますが、これは人気があります。なぜかというと書き手の個性が出ているからです。そうであるから面白く読めるのです。ところが社説は何人もの論説委員が意見を出し、その平均値を取ったものだからつまらないのです。

さてどちらのパターンが教育に近いのでしょうか、教育として面白くいくのでしょうか。もちろん担任の個性が出たほうが面白いのです。個性を殺して誰がやっても同じような授業ではテープレコーダーでの学習講座のようなものになってしまいます。こういうこと

が新しい「総合」を考えていくときのヒントになってきます。

ではそのヒントの中で今日はひとつ変わったものを持ってまいりましたので紹介させていただきます。今日先生方の授業を見させていただいてコレがたくさん出てきたと思います。「台詞」です。これは記録できます。しかし先生方がおそらく記録されないものを2つ出します。一つは「ト書」です。「……と笑って言った」、「……と怒って言った」といったものは多分記録に残らないでしょう。なぜ「ト書」は面白いかというとドラマになるからです。もう一つ面白いのはこれです。「演技」です。では生きた教育を総合していくための手掛かりとしてちょっとこれを実演してお目きかけることにします。

先生が教室へ入ってから3分間くらいの間に何をするのか、ということを見るのが楽しみで私はずっと教室の授業を観察してきました。小学校から大学に至るまで、今でも楽しみにやっています。こんな面白いものはありません。こんな面白いテーマはないのにどうして台詞ばかり書いているのでしょうか。それも要約した台詞なので味もそっけもありません。では演技をやって次に移ります。

まず先生が入ってくるときの入り方には大きくいって3通りあります。もっと多くありますが基礎にあるのはこの3とおりであって、あとはその組み合わせによって決まってきます。

まず、先生の視線がどこを向いているかということです。2番目は先生の手がどのようになっているのかということ。3番目が歩き方です。

入るときですが手ぶらで入る先生はかなりのベテランの人で、よく慣れている先生は下げて持ち、次に慣れた先生は前で持ち、一番あがっている先生は胸にだき抱えています。さて、視線はというと、じっと見るわけにもいかないのでさーっと生徒の顔を見るのですが、その時に頷く方もいます――頼むよという感じで――すると、よっしゃ！という声もちゃんと来るのです。このわずか3～4mの間を先生が動く間にとういった状態になるのでしょうか？どこを見るともなく歩いてきて荷物を教卓に置き、第一声が始まるのです。

ここまでの演技を見ただけでも先生の「情」（なさけ）の部分がどれくらい生徒とつながっているのか、ネットワークがどれくらいできているのかが大体推定できます。その「情」がベースになって、その上に授業の知識が乗っていくのです。この仕組みがドラマだと申し上げたい。これが「総合」をやっているところの面白い意味です。では、その「情」が土台になってその上にいろいろなものが乗っかって動いていきますがその動いていく仕種・仕組みをすーっと見ていきますと、こんな具合になっていきます。この「情」というのは「情けない」の「情」でありまして、心理的なものというよりはヒューマンネットワークと考えて下さい。先生と生徒が何本のパイプを持っているのか、それによってそこに乗ってくるコトバが、乱暴なものであったら親しみを表し、そっけないのがかえって尊敬を表したり、丁寧な言葉が逆に皮肉を表したりするのがこれのなせる業なのです。すると教育というのは分かりきった形でやってきたが、どうも違うという感じを持たれるのではないでしょうか。

さて言葉というものは面白いものです。私たちが日常使っている言葉は「用法」の中に収まっています。ある言葉の意味がわからないときに辞書を引いてそこに出てくる意味が用法というものです。もっと具体的にいうと、「教育とは何だ？」といった場合に、一番開き直った答えは、「教育は教育じゃないか。」というもので、これで立派な答えになります。開き直った態度が「情」（なさけ）として飛び出しています。これを簡単にして「用」とよんでいます。そして、この「用」の範囲に教育が収まっているとつまらないものになります。どんな先生に教わろうが同じになってしまいます。それでそのはみ出た部分が2つありますが、一つは「文脈」です。たとえば、先生が、なぜ自分は社会科の先生になったのか、どうして国語の先生になったのか、自分はとうして理科の先生になったのかということを語ってくれると、その先生の言葉からは物語が出てきます。先生と生徒の時代が違うことがわかるが、その違いを手掛かりにして対話ができるというのが文脈です。そうすると、「用」と「文脈」――これも略して「筋」と呼んでみます――が出てきますが、「筋」は最初は一本しかありません。ところが、「情」が豊かになると「筋」が2本も3本も出てきます。たとえば名古屋大学附属中学校・附属高校と呼んでいますが、これは正確には名古屋大学教育学部附属中学校・附属高等学校ですね。これをどこまで略していって意味が通じるのか？名大附属というのがあります。ところがもっと短くして「名附」（めいふ）で意味が通じるのか。わからない人が多いと思います。だから、ある限度の中でしか言葉は生きません。そうすると脈絡を考えていくときに、このようにやっていくとうまくいく場合と、このようにやっていくとうまくいかないという場合と、このようにやっていくともう一つの考え方になるかもしれないというように、いろいろの行き方があるのです。

「用」の範囲にとどまっている数学の一種を算数といいます。あるいは算術といいます。答えは一つしか出てきません。一つ出れば完結です。多元数理というのは何かというと、文脈をどんどんもってきますので

どんなことになるだろうか、ということです。その文脈が沢山あるということなので、モデルになるのはドラマモデルなのです。そこで先程申し上げましたように、先生方がここへ登壇される3分だけを見ていてもこういうことが分かります。そしてそのことが分かってきた方はこれがわかった方です。つまり言葉というものは「用」と「文脈」裏返していうと「筋」、もう一つ「意味」がありますが、これは辞書に出てくる意味ではなくてこれです――「味」です。これは言葉で表現するよりももう体で味わってしまうべきもので、「中身」、「筋」「用」、「味」の4つを念頭に置いて、これが言葉の基本的な力であると認識し次にいきます。

私は名古屋の商店街を5年間調べ上げました。それから名古屋に関する本も書きました。他の人と違ったことで何をやったかといいますと、名古屋に住んでいる人には絶対書けない本を書こうと思いました。それは行政区画としての名古屋ではなく、名古屋という記号がどのように広がっているのかを調べたかったのです。「時間とともに名古屋は変わっている」ということを一つの仮説に入れて、「年月とともに」という大きな時間ワクではなく、「朝、昼、夜」どう違うのかを調べてみました。地下鉄の一番列車から乗り初めまして、最終列車まで都合3回乗り続けました。これをやっていくと常識がどんどんひっくり返っていきます。「文脈」が透けて見えるのです。朝の一番列車は人が乗っていないというのはウソでして、一杯乗っています。海外へ行く人、遠くへ行く人、夕べどこかで飲みすぎて寝てしまった人などが帰るために乗っているのです。そうしますと文脈が何通りもあることの面白さがどんどん出てきます。

おわかりのように早朝人と会う時には、人間というものは知らない人とでも自然に挨拶ができます。ところが7時台になりますと挨拶しません。皆さん怖い顔つきになっています。そういう雰囲気を組み込んで理論を立てるとどうでしょうか。文脈は1つも、2つも3つもあります。それを捨てないで見ていきますと、こうなります。

授業の中で、あの子がいま間違えた、だからダメ、なのではなくて、そのために後の授業の展開がうまくいったという場合がいくらでもあります。そういう時、わざと間違える道化役みたいな、あるいは舞台まわしみたいなことをやり遂げる生徒も必ずいます。後に偉くなる素晴らしい人材に育つ子供であると私は思います。「用」の範囲でことを止めておくと答えは一つしかありませんが、「文脈」の方へ広げていくと意味は2つも、3つも出てきます。そしてここで出たものをそのまま捨てておかないで、使ってこれ――「味」――を出すのです。これが教育の面白いところです。

では、もう少し先へ行きます。小学校、中学、高校、大学と進んでいくうちに、人間というものはいろいろな「意味」を発見し、「味」と発見し、「筋」を発見し、「用」を見つけていきます。ところがあるところへ行くと、一番変わった現象が見られるのが中学なのです。中学は実に面白いところで、教育をやっているのか、トレーニングをやっているのか、わからない点があります。人生のトレーニングをやっているのです。それはなぜかといいますと、「人を愛することをどうやって使い分けるか」を知る時期だからです。好きな子が出来た場合、先生にも、友達にも、親にも、相談できないので秘めておかなければなりません。そうすると、映画やビデオを見たり、小説を読んだりして、その解決法を自分で獲得するようになっていくのですが、人に言えない知識も沢山持つようになってきます。

こうしたことが脈絡が沢山出てくる教育の面白さでこれを掴んだら「総合」のきっかけが出来たと思って下さい。そして、その「意味を味わいたい」というようになれば、自分も総合教育の最先端を行って、この子と共に歩む道を見つけてやろうということになります。そうするとお父さんの出番がかならずやってきますので、お父さんはお母さんと結婚に至った次第を日常の会話のなかで披瀝したほうがよいのです。恋愛だったのか、お見合いだったのか？もうそれだけの言葉で脈絡が3本くらい出来てきます。なあーんだ、日頃から喧嘩ばかりやっているのに恋愛結婚だったのか？あんなに愛し合っていた二人なのにこんなに喧嘩するようになった、と思っても、彼らは悲観しません。そこはちゃんと中学生らしく見ています。で、このことを頭において、今日の授業参観でそういう場面があったでしょうからいくつか申し上げます。

一つは生徒が先生に指名されたときの手の挙げ方ですが、小学校の低学年は真っ直ぐ挙げますが、4、5年生になってくると斜めに挙げます。学年が上がってくるにしたがって手の挙げ方が小さくなってきます。つまらない質問をすると、フンといってそっぽを向くようになります。そっぽを向いているのは知っている証拠です。当てれば必ず答えます。あまりにもたやすい質問には手を挙げないというのも一つの脈絡で出てきます。ベテランの先生は手を挙げていない子に当てます。他に立ち上がり方、前へ出ていくときの出ていき方にも中学生は顕著なものが見られます。さらに自分の席へ返っていくときに、その生徒へのサービスとして先生が「よくできました。みんな拍手！」これは小学校でやる手としてはいいが、中学生にやったら、

その中学生は「先生は自分を大勢の前で恥にさらした」と思ってしまいます。それで、情（なさけ）が切れてしまうのです。そしてその上に乗っている報（しらせ）がいびつになってしまいます。これが中学生の一番難しいところで、とくに一番難しいのが中学２年生です。だから私は中２の担任の先生を尊敬しているのです。あの苦労の多い、大人になっていく結節点にあるのを敢えて引き受けた中２の先生は偉いと思います。言葉でいっているのとは違う状況も多いのです。丁寧にやればいいというので、「皆さ～ん」と呼びかけてもダメです。「～しましょうね」といっても馬鹿にされます。男の先生も女の先生もボスにならなければいけません。で、敢えてやっていく。それが訓練というものです。それでここで新しい情（なさけ）が出来てくるのです。そうすると「あの先生がいるからなー」といった歯止めがかけられるのです。中２は９月から12月が危ないのです。

愛知県のＮ市での事件も12月に起こりました。

新聞の報道は、最初の３日間は自殺があったことを報じ、４日目に遺書があったことを述べ、責任の所在を追求し出した。おわかりのようにこれは数学的にいうと第一フェーズです。つまり第一段階のことです。第一段階では犯人探しをやるのです。このようなときなは教育長さんも校長さんも同じようなことを答えています。教育長さんは「起こってはならないことが起こってはなはだ残念に思います。」といい、校長さんは、「日頃から注意していたのですが、このような事件が起こってはなはだ残念に思います。二度と起きないように対策を考慮中です。」といいます。このような時にはマスコミは容赦なく何度もやって来て同じことを聞いていきます。何か血祭りにあげて喜んでいるのではないかというような現象が現れてきます。その時に評論家も同じようなことを言ってきます。「ヒューマニズムの精神からいくと、起こってはならないことが起きる。困った。」これで20年間同じことを言っている評論家もいます。そこで多元数理的に考えると、これはおかしい。起こってはならないことが起きたならば、その原因を探究することが大事であり、その原因も一つではなかろう、多元的に考えようということになり、先程のドラマ方式を使いまして調べました。調べていく中で、皆さんにお話しようと思ったことの一つが先程の「用」と「筋」と「味」なのです。

今からマイクのこちら側に３つの店の名前をいいます。こちらにも３つの店の名前をいいますから、その違いを第３フェーズ、第４フェーズくらいまで一緒に考えて下さい。

コンビニ、ゲームセンター、カラオケボックス

古本屋さん、自転車屋さん、雑貨店

私はこれらのところへ３か月通い続けました。先程の社会調査のやり方と同じく、夜、昼、朝と時間を変えて行ってみました。そして調べ上げました。このお店を調べればだいたいわかるということを。

ここでコンビニへ入りますと、お店の人は「いらっしゃいませ」とはいいますが、視線をこちらへ向けることはありません。その中に中学生や高校生がいますが、彼らはその街の生徒ではありません。大抵は隣街の子です。カラオケボックスの共通点は入れば誰でもお客さんであり、子供も大人も同じ態度で接してきます。したがって彼らにとっては入りやすいのです。一番先にいじめを見つけたのは自転車屋さんでした。自分が売った――自分の魂が半分入っている――自転車が転んでこんなふうに壊れるわけがない、この子はいじめられているんじゃないか、といって学校の先生にも訴えました。二番目に見つけたのは古本屋さんでした。「こんな本をなぜ売るのだ？こんなビデオをなぜ売るのだ？もったいないよ持っていたら。」と言っても、絶対に必要なのだといって、売っていくとのことです。次は雑貨屋さんの老夫婦のお話ですが、いつもやってきてお菓子をつまんで困った子がいる、という見方でいます。こちらは古いパターンのお店で、お客さんと日常会話を交わします。さて古い見方、つまり第一段階でいきますと、こちらは淡白過ぎていけない、こちらは親切であるということになります。

ところが今や皆さんはそうはお考えにならないでしょう。「文脈」をたくさん見た方は、もう少し突っ込んでみたら、彼らの息抜きの場所になっていなかったのかといったプラスの意味合いも見つけられます。私は粘ってゲームセンターへも行ってきました。お店の方は皆さん若いですね。20代です。教育的配慮など出せるわけがありません。そのお店の人が中学生の昼のお弁当の対応をしたのですが。１人2600円の寿司を６人前取ったと聞き驚きました。ここにいじめの実態が、聞かなくても、わかってきます。さらにここでいじめている子もかつてはいじめられた子でした。で、どこに問題があるのかというと、２つ申し上げます。一つは、彼らの言語能力です。この中、つまり「用」に閉じこもっている人は言葉が少ないのです。「筋」のわかる子は一つの言葉に幾通りもの意味を込めて、きちんと言葉遊びまでできるようになります。「味」がわかるようになると、さらにすごいですよ。相手のわからない言葉を使ってケムにまくことだってできますから。私はいつも外国語でガードするか、漢語でガードするか、先祖が残してくれた諺でガードするのか、いろいろな手があります。古典をしっかり学んでいけば、絶対負けません。うまく使えば相手の力を削ぐことが可能です。それから、わからなくても他の外

国語でも、さらには叫び声でもいいから言ってしまえばいいのです。この諺もどれくらい知っているかを調べたら、ほとんど知らないのです。

さて、この言語能力というのは、ただ単語を沢山知っているというだけではなく、「筋」を幾通りにも使いこなせるということです。もう一つはこれです。マスコミに出てくる教育長さんや校長さんの喋っている言葉はどうしても非難できない言葉なのです。文句ない言葉なのです。「起こってはならないことが起こって責任を感じてる」などと。だけどそれを何回も繰り返しているのはおかしいのではないでしょうか。とすれば一歩突っ込んで、これは言語能力が足りない。足りないとすればどのように教えるのか？それは授業の中にドラマが潜んでいることを教えて、あそこで先生がわざと間違えたのはちゃんと先生のシナリオの中に入っているのだということ、また誰かが間違った答えをしたのはこのような流れの中では意味があるということを認めてやらなければいけません。それをやらないとダメになってしまうのです。だからいじめの問題も取り上げてみました。

そのうちにもっと面白いことがわかりました。多元数理の研究科長に誘われて数学コンクールのお手伝をやってきましたが、一度数学の嫌いな人を集めてみました。ただし、大嫌いの人は除外して、ちょっぴり好きな人を選び出したのです。数年経ってその成果がまとまりかかってきました。それは50分の授業だからつまらないのです。彼らは3時間も4時間もやれるのです。ただし、問題の出し方と構成がうまくいけばという条件が付くのですが、どうも時間割に問題があるのではないのか、さらにカリキュラムまであるかもしれない、と思ったものですから、「数学がなぜ嫌いになったのか？」ということを面接で調べてみました。意味のある答えを見つけるために、紙に書いてもらう代わりに面接で聞いてみたのです。2つ出ました。

これは世界共通だそうですが、一つは数学の先生が暗い――「情」がない――のです。これは当たっているかなーと思って、こちらの附属の先生方の顔を思い浮かべてみましたら、例外が多かったようです。これがベースになっているのです。「先生も数学が嫌いだった。だけど今好きになったんだよ。途中こんなことがあってな。」ということがチラッと出れば大丈夫です。最初から数学の出来る生徒さんばかりを集めてやると批判もあるので嫌いな子を集めてやったのです。そのやった内容は、中学・高校の予習、復習のようなものではなくて、大学院クラスの数学を出してみました。これは答えが1つではありません。何通りも出てきます。具体例を出しますと、ある生徒は中・高と数学をいくらやっても成果があがりませんでした。それで、もう諦めろと、そのかわりお前の好きな数学をすることにしようということになりました。彼にカメラを持たせ、それでコンクリートの割れ目を撮らせました。これが第一段階、つまり資料の収集です。それから力のかかり方が何かあるのではないかなどということを彼は見つけはじめました。これが第二段階です。パターン化することです。では仮説を作れ、ということになりました。こうだから、こうなったんじゃないか、仮説をいくつも作れと。仮説を作るというのは楽しいことです、なぜかというとその人の持ち味がどんどん出てくるからです。口下手な子や引っ込み思案の子が弁舌さわやかになったり、暴走族だったのが落ち着いてきたりで、私たちもそれを見ているのはまったく味のある教育でした。このようにして大学院クラスの数学の問題は解けるようになったのですが、中学・高校の数学は依然として成績が上がらないのです。「必要悪ということもあるのでそこを通過してこい。だけど君達の数学の先生はこんなことを言わなかったか。」ということでいろいろ質問してみました。「ふん、こんな簡単なことお前たちは解けないのか、とその先生は言わないか。」と聞いてやると、「先生、よく知っていますね。どこで見たのですか。」と言いましたので、「見たのではない、仮説だ。」――当たった！このようなことは当たって欲しくないのですが。そこでお分かりのように、数学の先生は暗い。

二番目には数学の先生は数学が出来すぎる。だから、数学の出来ない生徒にいちいち皮肉をおっしゃるのです。「情」（なさけ）は萎むばかりです。これはいけません。「先生も以前は数学が苦手だったけれど今は得意になっているんだよ。理由はこうこうでね。」とか、「先生が明るい先生だったから。」などということを言ってやれば、その先生の人気も高まり成績もぐっと上がると思います。多元数理の大学院生が社会人に夜数学を教えているのですが、来ている人、たとえば、会社の社長さん、も大変面白がっています。なぜ面白いかというと、「こんな数学は今までやったこともないし、来る度に目が開かされる。」というのです。要するに「味」がわかるようになったのです。こういう数学があることをもっと世間に言っていけば、教育ももっと面白いものだ、ということがわかってきます。

更に、社会のこと、歴史のこと、文化のこともわかるようになります。そうすると文脈が何通りも出てくるという教育がありうるわけです。附属のように6年間もやっているところはもっとうまく出来ていいはずです。もう中学、高校と区別をするのをやめて、この中学はこの大学の先生と交流をし、この高校はこの大学の先生と交流を持つ、というように皆で「情」のネ

ットワークを広げていって、その上に「報」（しらせ）が乗れば、生きたものになってきます。現在は、ハードな面ばかり考えていますが、この両方がないと生きたものにはなりません。「報」（しらせ）だけではだめなのです。

「情報」ということばはかつて日本にはなくて、それを作りだしたのは明治の文豪の森鷗外でした。鷗外が或るドイツの本を訳していましたら、ドイツ語でNachricht［ナッハリヒト］という言葉がありました。それをどのように訳すか（英語でいえばinformationですが）と考えていました。どうもうまく訳せないので、大和言葉で「なさけのしらせ」と訳してみました。この言葉を鷗外が作ったのです。それ以後、私たちが、「情報」というときに、それが「なさけのしらせ」だということが背後に隠れてしまいました。「情報」というと、定義がまだ不明確でよくわからないと一生懸命やっていますが、それはこの中——「用」——に入ってしまったからです。「意味」と「筋」を何通りも広げていくと、「なさけのしらせ」があるのです。

そもそも教育というのは「なさけのしらせ」であったのではないでしょうか。だから教えていて面白いのですし、学んでいて面白いのです。何十年も経ってから先生をお呼びしてクラス会を開くというのは、小・中・高の中でも小学校が一番多いですね。大は結婚式の時に呼ばれるくらいで、それでおしまいです。つまり「情」（なさけ）が切れるのです。でも中・高は別の行き方があるのではないかと思います。総合ということはこのようなことなのです。したがって言葉のうえの「用法」「筋」「意味」についてよく知っておくべきです。裏返していうと「用法」とは「用」です。日常の世界のことであり、開き直ることができます。「教育は教育じゃないか、考える必要はないよ。」というように。だけど、「意味」というのは裏に「味」があります。「筋」、これは何通りもスジがあって手繰り寄せられます。それが学ぶということの面白いところです。そして「なさけのしらせ」が最後のオチになるのですが、この「なさけのしらせ」を最後に締めるのは何かというと……。

ここから先は、通常の講演ではないことをやらせていただきたいと思います。普通の講演ですが「ご静聴ありがとうございました。」とやるのですが、私は多元数理科学へ移ったものですから、多元的に締めくくりたいと思います。

本日は文部省の方から西阪室長が、多元数理科学からは高橋教授をお招きしております。おそれいりますが、お二人とも壇の上へお上がり下さい。校長先生もお願い致します。締めくくりでございます。結論は何が面白いかというと、笑いと共に終わるのが一番「総合」できるのです。

さて、この西阪さんが日本全国をまわって今日のような授業をご覧になって、文部省へのフィードバックをなさっているのです。また、私たちの行っている数学コンクールをずうーっと見に来てくださっていますし、我々が大学院を作るときに協力なさって下さったのです。そこで、ご感想を一つお願い致します。

西阪先生

堀内先生より過分なご紹介をいただきまして、恐縮です。先生の先程のお話の中で「情」（なさけ）という言葉が出てきましたが、そのときふと思いつきましたのが、今年の文化勲賞者の遠藤周作さんのエッセイの中にある次のところでした。「先生に望みたいことがあるとしたら、どういうことを自分は望みたいか？」ということでした。遠藤周作先生は今の灘高の前進の灘中学のご出身ですが、そこで大変な劣等生であったそうですが、そのような経験があったからかもしれませんが、それへの答えとして、「子供たちに自分の親以外で、自分のことを愛してくれている人がこの世の中にいるんだなー、ということを感じさせてあげる。そのことだけで、先生の使命のどれだけの部分を果していることになるのだろう？子供たちがそのことを感じているだけで、生涯どれだけ人間に対して温かい気持ちを持つことになるだろう？」ということを言ってみえました。私が行政の立場からは「愛」というようなことを言うのは、お門違いかもしれませんが、それを読んだときには大変心を動かされました。いま、堀内先生の「用」「筋」「味」と「情」というお話を聞いておりまして、それから午前中の公開授業を見せていただきまして、以上のようなことを感じました。

どうもありがとうございました。

高橋先生

これからは、問題解決型・課題解決型で多面的、かつ、多角的にいろいろな発想から取り組むのが大切であると思います。そして「総合」という言葉をキーワードにして皆様と共に生かしていきたいと思っています。

それでは恐縮ですが、皆様ご起立いただけませんでしょうか。子供たちのために教育を支えてみえる先生方のご尽力に心からお礼を申し上げて締めさせていただきたいと思います。私はいつも一本締めでやらせていただきますので、よろしくお願い致します。

よーっ　パン！

ありがとうございました。